

# 堀川の開削

慶長15年(1610)の名古屋築城に併せて、城下町が造られ堀川が開削された。

開削の目的は、築城資財の輸送路とか城の防衛線とも言われるが、城下への輸送路として造られた都市計画運河の性格が強い。江戸時代城下町には9万人ぐらいの人が暮らしていた。日々消費される食料や燃料など、膨大な物資を補充する必要があるが、当時大量輸送ができるのは船しかなかった。このため、町の建設に併せて堀川が開削されたのである。

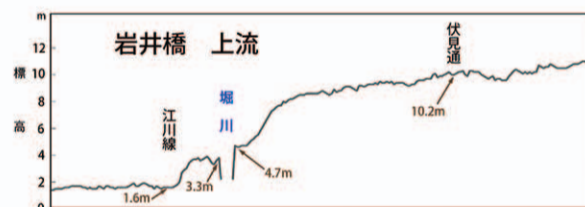
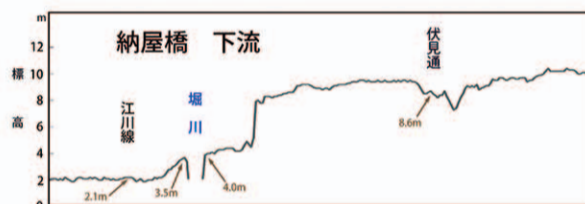


『小治田之真清水』(鶴舞中央図書館蔵)



名古屋台地と堀川

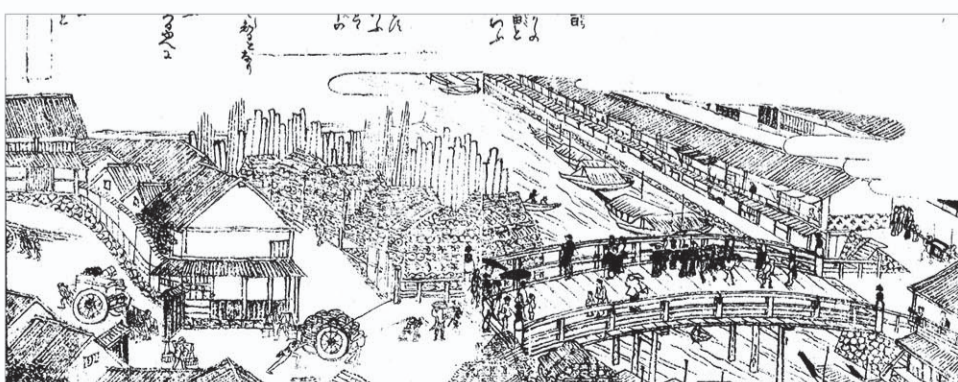
城下町は、周辺より約10mぐらい高い名古屋台地の上に造られ、堀川は台地に寄り添うように平地への斜面途中に開削されている。お城の中下門付近から、当時は海岸であった白鳥までの約6kmの運河である。



堀川は斜面の途中に開削(地形は現在のもの)『5mメッシュ デジタル地図』で作成

堀川の河口にある熱田は港町であり、全国津々浦々を結ぶ廻船が立ち寄る場所であった。堀川は熱田で全国輸送網と連結していたのである。大きな千石船から小型船に積み替えて堀川をさかのぼり、城下へ様々な物が運び込まれた。

名古屋は城下町なので、武士優先の町である。人口の3割が武士だが、町の広い面積が武家地になっており、町人は狭い地域に軒を接するように家を建て暮らしていた。しかし、碁盤割地域の堀川岸は町人に割り当てられている。堀川の舟運による商業や工業の便を考えての町割りである。



賑わう堀川岸 『尾張名陽図会』五条橋



堀川岸は町屋に割り振り『名古屋城下図』慶応元~2年(名古屋市博物館蔵)に着色